



東海支部報

日本山岳会東海支部

No. 148 Jan. 1, 2017

発行 公益社団法人
日本山岳会東海支部

〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMCビル

電話：052-332-8363 FAX：052-322-7924

郵便口座 00800-5-13749 「日本山岳会東海支部」

銀行口座 三菱東京UFJ銀行 覚王山支店

普通1222073 「日本山岳会東海支部」

編集 星 一男

印刷 (株) 浅井隆文社



第8回森の音楽祭 第九が森に響く(詳細本文4P参照)

目次

○年頭のご挨拶	高橋玲司	2	○猿投の森づくりの会代表に就任 そして考えること	小川 務	12
○ゴザフェス2016	伊藤さやか	3	○支部友コーナー	田中 進	14
○第8回猿投の森の音楽祭2016	毛利邦男	4	○東海支部の蔵書からの一冊⑩	石田文男	15
○2016秋二つのブラインド登山と 幼稚園児登山	前田隆久	5	○東海岳人列伝(5-1)	西山秀夫	17
○東海・関西・京滋合同 第20回森の勉強会	大塚正数	6	○視覚障がいの支部員への 支部報の配信	編集委員会	20
○同好会コーナー	山中光子 園田さえ子	7	○委員会への入会のお誘い	佐野忠則	21
○リレーエッセイ⑥ マカルー遠征余聞ーその5ー	山田明美 尾上 昇	9	○委員会報告 写真展実行	坂本 孝	22
			○会務報告	毛利邦男	23
			○ルーム日誌・会員異動	毛利邦男	25
			○INFORMATION		26
			○編集後記	星 一男	27

年 頭 の ご 挨拶

支 部 長 高橋 玲司

新年あけましておめでとうございます。
日本山岳会東海支部も設立56年目を迎え、支部として掲げた『トリプルワン』（安全第一・一体感を持つ・NO. 1を目指す）をスローガンに本年も取り組んでいきます。

さて、昨年的一年間を振り返りますと、東海支部におきましては海外登山において、山田利行君を隊長として『カナダワディントン登山隊』を派遣し、新ルートの開拓をはじめ素晴らしい成果をあげ、カナダのワディントン山域に新しい可能性を見出しました。他の海外登山関係では東海学生山岳連盟の若手育成を目的としてアコンカグアと、又日中韓学生交流登山にも学生隊員を送り出すことが出来ました。

各委員会においても活動も盛んでして、ボランティア委員会の活動などはすっかり定着してきていて、若手(特に東海学生山岳連盟の学生)を中心とした若年層のボランティア活動への取り組みの広がりは大変頼もしいところであります。6月の夏山フェスタも4回を迎え7,410人の来場者で大いに賑わい、支部を挙げての支援事業となりました。第8回を迎えた森の音楽祭も大盛況に終わり、一般市民を巻き込み多くの方が山でふれあい楽しむというスタイルに私自身感動を覚えました。

更には、支部の下部組織である東海学生山岳連盟主催の御在所フェスティバル(ゴザフェス)も会を追うごとに参加者が増え、発案者として大いに我が意を得ているところです。

また、委員会活動以外にも東海支部らしい存在があります。同好会です。毎号支部報に掲載されている「古道塩の道同好会」のシリーズは、楽しんで読ませていただいています。

その他、スケッチクラブも杉田さん、村中さんを中心に絵画を趣味とする同好の志が、スケッチ旅行を楽しんでおられます。山田さん中心のアルパインスキークラブもシーズン到来と張り切っています。まさに皆さん大いにクラブライフを楽しんでおられます。

以上の様に東海支部の活動も活発に行われ、特に若手育成も青年部・東海ユースなどが中

心となり、一定の成果をあげており支部の若返り化と活性化が軌道に乗ってきております。

今後東海支部に求められている事は、『一体感を持つ』取り組みであろうかと思えます。日本山岳会東海支部は、ご存知のように350名の支部員で、21の委員会と4つの組織『支部友会、猿投の森づくりの会、東海ユース、東海学生山岳連盟』を配下に持つ、日本山岳会の中で最大の支部でもあります。

先にも述べたように昨年来から多くの取り組みを行っていただき、今年もますます活発な活動がとり行われるものと期待しています。しかし支部の大きさと、委員会の活発さゆえに、見通しが悪く風通しが悪くなっているのも事実です。このように幅広く活動できる素晴らしい支部であるのにもかかわらず多くの支部員の方々が携わり方を知らずに日々を過ごされておられるのは、残念としか申しようがありません。

更には、支部の良さや活動の楽しさを体現できずに終わってしまうとしたら、こんな勿体無いことはありません。

今号の支部報より21委員会、6つの同好会の紹介を順次掲載させていただきます。

それぞれの委員会活動を幅広く知っていただき、支部員全員に活動を『見える化』することによって全支部員が一体感を持ち、委員会活動や支部活動に興味を持ち参加出来るような啓蒙の場を提供したいと思います。若者からベテランまでの世代が幅広く様々な活動に参加をする東海支部です。全支部員が一体感を持って活動し、東海支部を楽しもうではありませんか。

最後に東海支部が益々発展する事を祈念申し上げます。年頭のご挨拶に代えさせていただきます。



ゴザフェス (GOZAISHO FESTIVAL) 2016

東海学生山岳連盟 三重大学3年 伊藤さやか

皆さんこんにちは。東海学生山岳連盟です。私たちは9月24日(土)～25日(日)に今年も御在所山でゴザフェスを開催しました。今年も30名以上の参加者があり、東京や遠くは広島など東海地方以外からの学生も参加してくれました。今年は外部の方の参加が多く非常にうれしく感じました。

ゴザフェス初日はクライミング体験会を行いました。しかし、雨が降ってしまい早めにおりてくるチームが多く、あまり登れませんでした。毎年晴れるのですが、今年は残念です。そして、この日の夜はみんなで美味しい夕食を囲みながら、歌ったりバイオリンの演奏を聴いて語り合い、各大学からは、出し物などをしました。

雨が降り小屋の方にお借りした炊事場で行ったため周りとの距離が近くなり盛り上がったように思います。

2日目は前尾根・本谷・国見尾根など各コースに分かれて分散登山を行いました。天気は不安だったのですが、初日とは違って晴れて気持ちよく登ったり歩くことができました。

毎年行っているゴザフェスも今年で7回目です。ゴザフェスの目的は、山が好きな学生同士での交流を図ったり新しい仲間をつくる



御在所山の頂上にて

機会にすることです。私も今回参加して山の話をしたり一緒に登ったりすることで刺激をもらい山への意欲も高まったように感じます。また、各参加者がこのゴザフェスを通して、このようなつながりを作って新たな活動へとつないでくれたらうれしく思います。

最後に学生運営で至らなかったところもあると思いますが、皆さまの協力で無事に終えることができました。ありがとうございます。

「楽しかったよ。来年もまた参加するね」の言葉が有り難かったです。今回、参加していただいた皆様・藤内小屋の皆様・青年部の皆様・高橋支部長本当にありがとうございました。来年もぜひよろしく願いいたします。

◇ 東海支部だより配信の案内と読者登録のお願い ◇

東海支部では、各委員会のご協力で集めたメールアドレスを全てメールマガジンの読者(配信先)に登録し、11月からメールマガジン「東海支部だより」の配信がスタートしました。

メールマガジン「東海支部だより」は、東海支部の行事の案内や支部および支部内各委員会からのお知らせなどを、支部員、支部友会員の皆さんに随時配信するものです。配信の対象は、東海支部の支部員、支部友会員のうちの希望者としますが、支部内の連絡をスムーズに行うため、メールアドレスが登録されていない支部員・支部友会員の方は、この機会に読者登録をしていただくようご案内致します。できるだけ多くの方に読者になって頂きたいと思っていますのでご協力をお願いします。

読者登録は、日本山岳会東海支部のホームページの「メール配信システム」のメニューから行うか、メールで行ってください。

東海支部ホームページ <http://jactokai.sakura.ne.jp/shibuhp/>

日本山岳会東海支部 で検索

メールアドレス : mail_service@jactokai.net

メールでの登録の場合は、メールアドレス、会員番号、氏名、使用する機器の種別(パソコン・スマホ・携帯委電話の別)を記載してください。

携帯電話(ガラケー)の場合は、機器の表示文字数の制限などのため、メール配信ができない場合もありますので、なるべくパソコン、スマホのメールアドレスを登録してください。

第8回猿投の森の音楽祭2016

森の音楽祭実行委員会 毛利邦男

去る10月22日(土)に第8回猿投の森の音楽祭2016を開催した。今年も晴天に恵まれ予定通り森の中での開催となった。今回は演目がベートーヴェンの第九であった。そのため今年は、合唱団、音響設備の手配が必要となった。合唱団については東海学園の西村先生に手配していただくこととしていたが、瀬戸の第九を歌う会からの参加希望もあり、合唱団は合わせて100人規模になることとなった。それに加えて4人のソリストが演奏に加わることとなった為、合唱団・ソリスト用のマイク設置の要望を受けた。

東海支部で必要な機材の手配を試みたが不調に終わった為、西村先生が代わりに名古屋工学院専門学校に依頼をし、必要な音響設備を設置することが出来た。前日には、音響設備の配置、ソリスト用特設ステージを手作りで用意、翌日の本番に備えた。

今年の音楽祭は第1部アルプホルンの演奏、交響楽団と合唱団による演奏と参加者全員による「雪山讃歌」の合唱、第2部は「猿投山山頂をめざしたハイキング」と「自然観察会」の構成とした。

音楽祭第1部は高橋支部長の挨拶のあと、アルプホルン名古屋の皆さんによる演奏で始まった。アルプホルンの演奏が終わると、西村先生から楽団員、合唱団とソリストの紹介を受け、オーケストラの演奏が始まった。

鳥のさえずり、小川のせせらぎ、ふりそそぐ風に奏でる木の葉の音色を交えながら、交響楽団の美しいハーモニーと迫力あるソリストの歌声を鑑賞した。演奏後の花束の贈呈が終わると、公務の間を縫って駆けつけていた

だいた瀬戸市長伊藤保徳氏から挨拶を頂いた。

第1部の締めは参加者全員による「雪山讃



アルプホルン名古屋による演奏

歌」の合唱である。想念寺住職の渡辺観永さんの歌唱指導の下皆さん元気な声で雪山讃歌を歌い上げ第1部は終了した。

第2部のハイキングでは定員を60人としたが140余名の応募があったため抽選とし、最終的に69人の皆さんに4つのコースに分かれて山歩きを楽しんで頂いた。自然観察会は一般参加者80名＋支援スタッフ30名が10班に分かれて出発、午後3時30分には全プログラムを終了し音楽祭は成功裏のうちに閉幕となった。



自然観察会

音楽祭に参加して頂いた方には、素晴らしい音楽と自然とのふれあいを存分に楽しんで頂けたものと信じている。参加した方に実施したアンケートでもほぼ全員の方から「音楽祭を存分に楽しんだ」旨の感想を頂き、準備の苦勞が報われたと喜んでいただいているところである。

観察会のコース整備、オーケストラ会場並びに道路整備のため3回にわたって行った事前作業と前日の準備作業に参加して頂いた、猿投の森づくりの会の皆様および東海支部の支援スタッフの皆様の尽力・協力に対し、この場を借りて改めてお礼を申し上げる次第である。



ソリスト

東海支部における、視覚障がい者支援登山の始まり 2016 秋・二つのブラインド登山と幼稚園児登山

ボランティア委員会委員長 前田隆久

今年度から、支部員で視覚障がい者(現在4名在籍)の方を対象に、月例山行が始まった。主旨としては、せっかく入会して下さった視覚障がい者の方に、少しでも多く山に行っていただくという事からだった。11月の時点で2回行っている。

今回は、東海支部で視覚障がい者支援が始まった経緯を説明する。正式に委員会行事として行われたのは、2009年11月30日の三河の五井山登山であった。視覚障がい者7名、支援者21名が参加して行われた。これには伏線があって、2006年、加藤守彦委員が、碁盤石山に現在委員会メンバーで全盲の山田弘さんと登り、深く感銘を受けたのがきっかけである。その後、現在支部員でもある全盲の吉田清恵さんと雪山も含め個人山行を重ね、2008年にボランティア委員会のメンバーを加え体験登山を2回行った。それが翌年の正式な委員会行事としてのブラインド登山につながった。今年で15回を数える。

名古屋盲人情報文化センター原田顧問のアドバイスに「視覚障がい者が、日本山岳会の山行に参加することに意味がある」とあったが、そういう意味からも2009年の委員会山行は、大きな転換点でもあった。

秋のブラインド登山



今年、11月13日(日)、そのブラインド登山が、多度山の多度大社を起点とする周回コースで行われた。全盲6名を含む視覚障がい者12名に対し、家族同伴者3名、東海支部支援者31名合計46名が参加した。今回は東京の六つ星山の会から、全盲の障がい者1名、支援者2名が参加した、この活動も少しづつではある

が横に広がってきている。また、青年部2名、東海学生連盟から5名参加して下さり、毎回ながら心強い。当日は、晴天にも恵まれ脱落者、事故もなく、無事終了した。

10月23日(日)、もう一つの視覚障がい者支援登山、ひまわり山行(月例のブラインド登山)が行われた。支部員の視覚障がい者3名と、支援者6名が参加して、伊那の吉田山へ行った。広く支部員以外も対象とする春と秋のブラインド登山と、支部員を対象とする月例のブラインド登山は、両輪として今後も続けていきたい。第三回ひまわり山行は、12月17日に予定している。

親と子のふれあい登山教室



その他にも、秋には恒例の親と子のふれあい登山教室(幼稚園児登山)が行われた。幼少期での自然との触れ合いと、自然の中での親子の絆を、登山を通して感じてもらうという主旨で始まった行事だが、今年も10月15日(土)と、29日(土)の2回に分け行われた。15日は、自由ヶ丘幼稚園の親子56組112人、幼稚園スタッフ4名、支部員12名の128名が参加。29日は、同じく自由ヶ丘幼稚園の親子34組68名、幼稚園スタッフ5名、支部員15名が参加した。両日とも天気にも恵まれ、子供たちの歓声が響き渡る楽しい登山だった。

2016年も、春と秋にいくつかの委員会行事を行ってきたが、すべてを事故もなく実施できたのは、委員会メンバーのみならず、支援者のみなさん、また、青年部、学生連盟の皆さんの若い力があってのおかげと感謝している。2017年も、東海支部員みなさんのご理解とご協力をお願いしたい。

第20回森の勉強会

「天然記念物 与喜山暖帯樹林」参加報告

自然保護委員 大塚正数

平成28年11月5日(土)、6日(日)の2日間に亘って奈良県桜井市初瀬(長谷寺)の井谷屋で森の勉強会が開催され参加した。東海、京都・滋賀、関西、群馬および首都圏の自然保護委員会メンバー22人が集まり、初日は、大阪産業大学大学院人間環境学研究科教授、前迫ゆり先生を講師に迎え、森林と生物の係り『照葉樹林とシカをめぐる生態』について講義頂いた。

前迫ゆり先生の講義内容の『シカとナラ枯れと生物多様性』についての要旨

1. 大阪では、2009年高槻市でナラ枯れが確認され、拡散している。ナラ枯れ後の実生の推移を見ると、ギャップが生じたにもかかわらず、シカの生息域では植生の増大が見られない。非生息域には林床に実生が多数発生している。
2. シカ密度の高まりで下層植生が乏しくなり人工林の樹皮剥ぎも著しい。
3. 琵琶湖の竹生島では、カワウの糞害による木々の枯死が景観被害となっている。
4. 自然と人とのかかわりを今一度考える必要がある。

また、『シカと森林をめぐる生態学』についての要旨

- ①シカの影響は森林にとどまらず湿地や高山植生にも及び、日本の植生の約50%でその影響が確認され、個体数増大に伴う生物多様性の劣化が著しい。
- ②長谷寺の寺領与喜山暖帯林などの照葉樹林は森林全体の1.6%になっている。
- ③シカはナンキンハゼやバイケイソウを食べない。ミヤコザサ、スズタケも食べる。餌が足りずにリター(落ち葉)を食べている。
- ④大台ヶ原と大杉谷をシカが移動し、西大台ではブナ林床にバイケイソウ群落が拡大している。東大台ではトウヒ林、正木ヶ原のミヤコザサが食害にあっている。
- ⑤不嗜好植物のシキミ、クロガネモチ、イズセンリョウもシカが食べるようになった。
- ⑥イラクサやクリンソウも採食し、ナチシダや外来種のナンキンハゼ、ナギが増えている。



与喜山暖帯林

⑦シカの長期的採食の影響で、イチイガシ林がナギ林に不可逆的変化が起きている。上記の現状と実態は全国的に広がるシカによる食害、森の土壌の裸地化による自然災害等これら「シカ問題」の現状とどう立ち向かうかを問われる講義内容であった。

2日目のフィールドは与喜山暖帯林で行った。樹木の種類は指定地域の周辺も含め約950種に及び、我が国の暖帯林北部における代表的な林相を示す森林。野鳥の宝庫にもなっている。原生林の状態が残され、国指定天然記念物になっている。與喜山満神社の裏参道脇から天然記念物に指定されている与喜山暖帯林に入り、急傾斜を登って天神山(455.3m)を踏みしめた。途中には、スタジイの大木と思われる幹を望みながら林内の盤座を見てツブラジイやウラジロガシ、シラカシを見て主要稜線に至り右に植林した杉、ヒノキを、左に原生林の木々を目にしてその相違を実感した。下山では、イノシシのヌタバやイズセンリョウの白い実などを見ながら初瀬ダム側に下り立ち、「まほろば湖」脇の公園での昼食となった。県道を下りヤブミョウガやクサギのブルーの実を見た後は与喜山の眺望を愛で、長谷寺へ至り、門前で解散した。20回続いた森の勉強会も今回を持って終了とし、それぞれの支部で今まで学んだ事を活かして各支部の森づくりに励み、今後は、自然保護に関する情報を交換し合い、企画した研修勉強会などを計画した際は交流を図ることを確認した。

同好会紹介コーナー

東海支部員が有意義なクラブライフを享受するための組織として活動する同好会の活動を紹介するコーナーです。

古道塩の道同好会

山中光子

来年のNHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」で話題になると言う高森町を後に果物の町、松川町へ入る。今迄は愛知県から柚路峠を越え、長野県下伊那郡を歩いていたが、やっと長野県上伊那郡に入る。

今はブルーベリー狩りが、あちこちで行われるようになり、梨やりんごがメインだった松川町もブルーベリーを求めて、観光バスで行楽客が押し寄せる。

今回の目的である松川町の旧道の所々に標識が立っているが、雨風にさらされ古くなり、記載されている文字も薄くなったままの表示となっている。

高森町も松川町も2~3所を除き、15号線と昔の旧道が重なっている場所が多い。この先の飯島町では途中から旧道に入り、南街道や北街道と名の付いた街道を横切り、おもしろい旧道に入る。

町の方のお話しでは、お嫁に来た時にはあの山(中央アルプスを指し)もあそこまで崩れてなかったのに、年月と共に山が小さくなっていくと、嘆いてみえた。

車で通る七曲りと言う山道も、歩いて旧道を行けば、すぐに与田切川の川べりに着く。昔は学生の通学路となっており道は日陰坂と言う。旧道らしく石畳みで距離も短く通学路になっている。その前は街道として使われていた道。最近の子はすべて親が学校まで車で送るので日陰坂は使わなくなると。現在では入口は背丈ほどのある草をかき分け、蜘蛛の巣を、棒でぐるぐる回して払いながら歩く。足元の綺麗な石畳みは人が歩かないから、苔が生えていて気を付けないと滑る。出口の所迄降りると、集落になっているので、草も刈られ芝生のような綺麗な道に変身。何事も無かったように、153号線に戻り、与田切橋を渡る。

飯田線飯島駅の近辺は、町が区画整理されてしまった商店が軒を並べている。

153号線から一本西に入ると、立派な梅戸神社があり、そのほぼ並びに「飯島町 歴史民俗資料館」が飯島陣屋として建っている。入館料



飯島陣屋にて

300円で写真は勿論、展示物はすべて触っても良いという展示館。江戸幕府は最初に陣屋を松川町の片桐宿近辺に置いたが、5年後飯島町に移された。代官所の役割がわかり、白洲もある。館内の説明の後には囲炉裏端でお茶と漬物までいただいた。

スケッチクラブ

村中征也

近江八幡の秋を満喫

11月17日(木)、スケッチクラブ員8名で、秋色を求めて近江八幡を訪れました。

伊藤忠始め近江商人発祥の地として有名。絵筆を携えて再訪したかった街ですが、JRになってからは、新幹線ーJR西日本と乗り継いでの旅。



長命寺本堂前にて

まずは、西国三十三か寺の三十一番長命寺へ。市郊外の琵琶湖を見下ろす山の中腹にあり、808段の石の階段を上ります。“八千年や柳に長き命寺 運ぶ歩みのかざしなるらん”…「寿命長遠」よりも「息切膝痛」が心配でした。

3世紀後半からの歴史ある寺で、本堂と朱塗りの三重塔・鐘撞堂が見事で、琵琶湖を見下ろす景観とともに訪れた甲斐がありました。

市の中心部に戻り、日傘禮八幡宮にお参り後、目当ての「八幡堀」へ。市を東西に流れる堀は、

昔は商品の運搬用だったのが、今は観光客を乗せた舟が行き来しびっくり。堀界隈は観光スポットだけに多くの観光客が集まり、絵筆を取る人の多いのに納得でした。

近江八幡は、昔の感覚から小さい街を想像していたが、相当な規模と旧跡を活かした活気ある市と認識を新たにす。今年は冷え込みが早く、長命寺も八幡堀も見事に色づき、念願通りのスケッチを楽しむことが出来ました。

今後の予定は、2月末の作品展に向けて、全員が制作に励みます。追って案内しますので、多くの方のご来場をお待ちしております。

《事務局》村中征也・加藤和子・武内喜代子
《代表》杉田博

読図同好会 代表 園田さえ子

活動内容の紹介と入会の勧め

第3月曜日午後7時より9時まで、ルームにて国土地理院の地図読みに取り組んでいます。山行計画と地図を基にして、登山中に起こりうる問題点(現在地の把握、分岐での登山路の方向、所要時間、危険箇所など)をあらかじめ確認し、道迷いのない山行ができるように頑張っています。時には、特徴ある山岳写真と地図を照合して、実際の山容を正確につかめられるようにトレーニングもしています。勿論、概念図の作成にも取り組んでいます。

毎月第4日曜日には山行を実施しています。

平成28年に登った山は次の通り

3月：水後山～蟬が岳 4月：五蛇池山(途中まで) 5月：白尾山 6月：橋ヶ谷～天狗森山～南尾根 7月：長者峰(沢～東尾根) 9月：余呉三方ヶ岳・周回 10月：越山・南尾根

60歳代を中心に13名が活動しています。趣味の世界ですが山登りを楽しみにし、仲間を大切にしながら頑張っています。私たちの同好会への入会にご興味のある方歓迎です。毎月第3月曜日の例会を開催していますので覗きにきてください。

東海アルパインスキークラブ(ASC)

代表 山田明美

当同好会は気分の良い仲間とスキーを楽しむ会です。仲間が有ってスキーに行く機会が増え情報交換してポテンシャルを上げます。当初少人数で真冬の深雪、春の残雪を楽しむ程度であったが、バックカントリーの名の下、世間に認知され愛好者が増えてきています。400名近い会員を有する当支部にも隠れ愛好者が

きつというはず！と思い同好の志を求め H25年10月に立ち上げた。ロコミと強引な勧誘で集めた『8名』で7番目の支部同好会として登録したが、現在17名と会員倍増しました。

クラブ目標

- ①個性を大事にし、深い信頼と暖かい寛容な精神を持って結ばれ、スキーで山を歩き、登り滑る事を楽しみとして活動します。
- ②技量は問題でなく、気が合う事を第一とする。
- ③登る苦闘を楽しみに変える、そんな活動が出来る人が仲間です。

運営

まとまった会則は作りません。クラブ員として必要な常識と友人を思いやる暖かい心を持っていればどのような活動を展開してもJACの会則に触れなければまったくの自由です。自由ですから会員一人一人に当然重い責任が有ります。



2月の虎子山

活動

一昨年シーズン(平成26～27年)は1月に白馬五龍の尾根で山スキー中、4月には登山中にと短期間で会員2名が尊い命を亡くすというツライ、悲しいシーズンでした。会員も事の重大さから会の行事をすべて中止し、捜索活動に当たった。昨シーズンは少雪の影響で3月の乗鞍岳のみで、行事として予定したスキー山行の1月は雪不足、2月は悪天(雨)も加わってほぼ計画倒れに終わりました。

今シーズンすでに北の地方では雪の便りが聞かれ、東海地方でもヤブ山が白銀一色に変わる日を楽しみに、北ア、奥美濃の山に想いを馳せスキー道具の手入れに余念が有りません。山スキーに興味のある方、一緒に歩き滑ってみませんか。スキー登山の醍醐味を思う存分味わえます。

マカルー遠征余聞 その5

常任評議員 尾上 昇

BC —水平思考—

3月22日先発隊BCを建設。登山活動開始からわずか10日余りでC3が建設され5月の頭には、登頂かもの安易なムードが漂っていた。ところがである。当初順調だった計画が、ブラックジャンダルムの攻略に手間取っていたのと、隊員の高所順化がうまくいかなかったことで遅れが生じてきた。余りにも順調なスタートが、隊員の高所順化も狂わせてしまっていたのである。

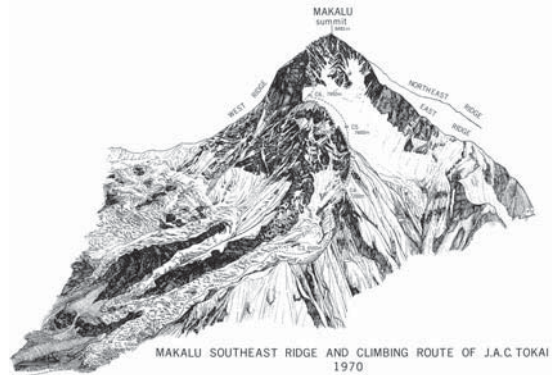
4月の末である。BCで荷揚げの管理に携わっていた松浦隊員と尾上は、ある異変に気付いた。燃料のプロパンガスの消費量が異常に多いことである。登攀期間60日とプラスアルファを考慮した消費量が計算の根拠である。

今回の登山隊は、BCも含めて全キャンプをプロパンガスを使用することとした。点火一発。カロリーも強く早く調理できるし暖かい。最高の選択肢であった。ところがである。異常に減りが早いのである。このままの調子で使用したとなるといつ頃無くなるかを計算したところ、5月中旬で使い切ることが判った。

こいつは、大問題だとばかり、まずは、BCのプロパン使用を全面禁止。直ちに全量薪利用に切り替えた。BCから1日程下ったところの森林帯で薪が補充出来ることが分かっていた。連日、手の空いたシェルパとキッチンボーイが薪取りに下った。併せて全キャンプにプロパンの節約を命じた。

一応窮地を脱したものの、それでも不安があったので詳細な消費量の計算をやり直した。すると答えは、5月20日頃までが限度と出た。余裕が全く無い。万が一緊急事態でも発生したら、たちまちピンチ到来である。下手をすると、燃料切れで撤退ということにもなりかねない。前代未聞の恥話である。余りにも便利であったので、調子込んで使い過ぎた面もあるが、このことは、プロパンの消費量を低く見積もった装備係の大チョンボである。

さて、このピンチどうやって乗り切ればいいのか。試行錯誤するのだが、解が見当たらない。松浦さんも尾上も思案投げ首状態になってし



マカルーキャンプ配置図

まった。C1を撤収、BCからC2への直接の荷上げも考えた。しかし、BCからC2の高度差1,200mを重荷を背負っての往復は負担が多すぎるし、安全面からもC1は飛ばしたくなかった。

そんな時、尾上が松浦さんに「水平思考しましょうよ」と中半冗談で投げ掛けた。「水平思考って？」松浦さんは訝る。そうです「水平思考です」と尾上。水平思考とは、イギリスのエドワード・デボノが提唱した思考法で、当時日本で結構もてはやされていた。尾上も著書を購入して読んでいた。

水平思考とは、ある問題の解決に迫られた時に、問題設定の枠に従って考えることを避けて、自由に異なった様々な角度から思考を巡らせ手掛かりを得ようとする思考法である。ちなみに、水平思考に対して問題設定の枠に従って考えるのを垂直思考という。

よし、水平思考やってみようかと松浦さん。尾上が、それに応じて、水平思考というからには体も水平にすることから始めなければと、これも冗談に言う。松浦さんもそれに乗って先ずそうしようということになって、集会テントの中の段ボールを利用したイスに二人並んで仰向けに寝た。言うまでもない。水平思考と体の平行は関係ない。頭の中を空にして、全ての枠を取り払うことなのである。

テントの天井を見つめながら二人で、「燃料だろ」燃料にはどんなものがあるか、から始める。「使っているプロパン。ブタン。メタン。

薪。炭。ケロシン。ガソリンだろ。アルコール。都市ガス。牛糞にヤクの糞。原子力もある」「でもここで手に入るとしたら……ケロシンか薪しかないな」「ケロシンストーブを買いに走らせようか」「ケロシンなら手に入る」「ストーブも一緒に買えばいい」。

今でもそうだが、ネパールの山奥では、薪。街では、薪とケロシンストーブの併用が通常である。でも買ってくるとなればケロシンの手に入る街まで往復2週間はかかるであろう。いざ届いて使い出す頃にはもう登山終わっている可能性がある。危険である。どうしたらいい。そうすると薪しかない。今、直ぐ手に入る燃料は、薪しかないのである。

しばらく沈黙が続く。「薪か」どちらが言い出した訳ではなかったが、「だったら一度上のキャンプで薪試してみる価値があるかも知れん」。でも氷河上の5,300mでの薪の使用など聞いたことがない。果たして上手くいくか、大いに疑問だ。でも、もし仮にC1での薪の使用が可能なら、C1のプロパンを全量、上のキャンプに上げれば何とか持つことも分かった。「よし試しにやってみるか」。

早速その旨をC1に伝え、翌日細くてカラカラに乾いた木の枝を選び一斗缶と炊付用の新聞紙共々上げさせ試みさせた。C1の住人は、驚いた。飯食うのに氷河の上で薪焚けである。その結果は、とても水を沸騰させるのは無理だが、温かいお湯位ならできるとの返答であった。

C1用のプロパン全量上げろの命令が下されたことは言うまでもない。緊急事態ということで納得させ、以降およそ20日間ばかりを薪を使用させた。C1の5,300mでは、酸素不足で勢いよく燃えない。承知の上である。BCの4,700mでは、ボンボン燃える。高度600mの差でこうも違うものなのであろうか。

C1の住人からは、毎日不平、不満タラタラである。仕方がないので途中で尾上がC1へ上がって様子を見に行ってみた。C1の連中これみよがしに尾上の目の前で薪を燃すのだが、メラメラとは程遠く、チョロチョロである。生温かいお茶が出てくる。「熱いねえ。旨い。ご馳走様。もう少しの我慢、我慢」と言いながら「熱いわけないじゃないですか」の声を聞き流し、そそくさとC1を後にした。

試しにC2でも薪を試みさせたが、ブスブス



C4へ向かってC3を後にする
(眼下にキャンプC3)

と燻るだけで全く用を足さなかった。

恐らくヒマラヤ登山史上、5,300mの高さの氷河の上で薪を焚いて飯食っていたなどというのは、未だかつてなかったのではないであらうか。

C3にて —バカヤロー事件—

4月も後半に入る。ルートが延びず隊員もシェルパも苛立っていた。そんな状況の中でのC3で大変なトラブルが発生した。「バカヤロー事件」である。事の顛末は、次の様なものであった。

その日、4月21日C3では、ブラックジャングルムの攻略に手間取っていて、隊員やシェルパの交代が頻繁であった。数名の隊員が、BCに下りることになった。その内の一名が、下りる準備をしている途中で、喉が渴いたのかC3に留まっているシェルパに水を作ってくれとたのんだ。

そのシェルパも忙しかったのであろう。「サーブからプロパンガスを節約せよと言われてる。BCへ行けば、水などいくらでもある。BCで飲めばいい」と水作りを拒んだのである。それでもいいから作れ、作らぬの押し問答が続いた。その時それを聞いていた同じ下る予定のK隊員が「プロパン節約しろとは言ったが、必要なものは必要だ。水ぐらい作ってやれ。やれないのか。作れ」と強い口調で命じたのである。

C3には、サーダー(シェルパ頭)のミンマ・ツェリンが居た。ミンマ・ツェリンは、上のルート開拓に向かう予定であった。K隊員とサーダーは、同じテントの中にいた。そのサーダーが、K隊員に向かって、「シェルパに水を作る

義務などない。飲みたかったら自分で作れ」とシェルパの肩を持ってこれまた強い口調で反論した。K隊員、若干直情型人間である。「そのものの言い方は、なんだ。サーブを馬鹿にするのか。この野郎」と怒鳴った。さらに悪いことに、更に言い返そうとするサーダーの襟首をつかみ「なめるなよバカヤロー。文句があるなら外へ出て決闘だ」とやった。

余程サーダーは、この言葉に頭に來たらしく、「馬鹿野郎というのは、どういう意味だ。殺してやる」と叫んだ。勿論、二人が外へ出て決闘などをするわけがない。気まずい空気が流れた。K隊員らは、別のシェルパが作った水を飲んでC3を後にした。

一応これは、これで終わりと思っていたK隊員達であったが、その後一悶着起きた。この騒動をサーダーは、BCの原登攀隊長にトランシーバーで訴え、「今後K隊員が登山活動に参加するならシェルパは全員登山活動を拒否する」と伝えて來た。原登攀隊長は、これを重い問題として捉え、サーダーにBCへ下りてきて話し合うことを提案した。

翌日の夕刻、下りてきたサーダー、連絡将校のタクール少尉、松浦隊員、それに原登攀隊長を交えて四者会談が持たれた。ウイスキーをや

りながらである。

サーダーの言い分は、次の通りである。

シェルパの考え方では、あの様な状況は、自分はKに殺されると思った。襟首をつかまれるなどということは、犬、畜生への扱いと同じである。更にバカヤローについては、サーダーは、他の日本隊にも参加していてその意味を理解していた。バカヤローは、最大に相手を侮辱する言葉であることをである。

K隊員のバカヤローを含めた発言や行動は、行き過ぎたものであるが、売り言葉に買い言葉であったこと。C3の苛立っていた状況がお互いにそうさせたことを縷々話し合った結果、サーダーの怒りも一応収まった。会談の終わりがけにK隊員が呼ばれ、サーダーに対して行った一連の発言と行動を謝罪しサーダーも了承して一件落着となったのである。

※サーブ：ネパール語で旦那を意味する。この場合隊員のことをいう。もともと英語。イギリス人がシェルパを高所人夫として雇った名残。

※連絡将校：登山隊と現地、更にはシェルパなどと揉め事が起きた時などの調停役。当時は、ネパール陸軍の将校が務めていた。

“2017年度 徳本峠越えとウエストーン祭” へのお誘い！
上高地へのクラシックルートで徳本峠越えを楽しみましょう

日時	2017年 6月2日(金)前夜泊 3日(土)～4日(日)
集合	6/2 石川旅館(新島々駅から 徒歩1分)午後5時 *勤務を終えてからの集合もOKです(但し 夕食無し)
行程	6/3 徳本峠越え(徳本峠入口～岩魚留橋～徳本峠～山研) 約20 ^{km} 10時間 6/4 ウエストーン祭 & 信濃支部主催の午餐会参加(上高地温泉ホテル) *帰路はチャーターバス
ポイント	山野草が咲きほこる 古の街道(上高地.クラシック ルート)から徳本峠へ、峠からウエストーンが涙したという前穂高の雄姿を眺め JAC山岳研究所へ… 他支部の方々との懇親会も楽しみの一つです
宿泊	6/2 石川旅館(新島々) 6/3 JAC山岳研究所(上高地)
参加費	12,000円 (山研宿泊代、ウエストーン祭参加記念品代、午餐会会費 および傷害保険料含む) 但し 交通費&石川旅館代は実費です
定員	10名 (締切り4月末 先着順)
主催	JAC山研運営委員会 申込み先 松本陽子(山研委員) 〒487-0013 春日井市高蔵寺町3-4-8 メール yo-kom@nifty.com 携帯TEL 090-7859-4031

猿投の森づくりの会代表に就任 そして考えること

猿投の森づくりの会代表 小川 務

今度、和田代表の後を継いで、猿投の森づくりの会の代表をお引き受けすることになった。今後共宜しくご指導賜りたくお願いする次第である。この機会に森づくりの会の経緯や日頃思っていること、更には今後の森づくりの会の展開など述べさせていただきたいと思う。

東海支部と森づくりの会の経緯

日本山岳会東海支部は1961年に創設され55周年。ほぼ一年おきに海外登山を実施し、現在までの登山隊の総数は38隊、中には「環太平洋環境調査登山隊」のごとく19カ国33山の登山をした事例も。実際の隊の数は80隊近い。

森づくりの会創設の母体となった支部自然保護委員会の活動はこれら海外登山隊の環境調査を受け持ち、地質、氷河、気象などを受け持ち、登山隊の社会的な評価の向上や、新聞社などの後援、外貨の確保に貢献した。特に環太平洋環境調査登山隊は地球規模の酸性雨調査を行い「ローレックス賞」を受賞した。

1997年には、支部自然保護委員長を私(小川)から橋村一豊氏に交代した。(現在は南川陸夫氏)。

その後、京大の「芦生の森」見学が契機となって東海、関西、京都支部共催の「森の勉強会」がスタートした。内容は、一泊二日の勉強会で、森林生態学などの第一人者を主任講師に迎え、講義とフィールドスタディを行うもので、1999年の第1回から第4回は、「芦生の森」で朝日の森(滋賀県朽木村、現・高島市)森林環境研究所長、海老沢秀夫氏や金子有子氏を講師に迎え開催した。

2006年第9回と2007年第10回は、マレーシア・ランビル国立公園にある京都大学研究林で所長の中静 透教授から直接説明を聞くことができた。第11回～第19回(省略)。

この勉強会も本年11月5日、奈良県長谷寺温泉で開催された第20回をもって閉会することになった。

森林インストラクター受験のすすめ

現在、猿投の森づくりの会には5名の森林インストラクターがいる。

川合壽之(4-0076号)、橋村一豊(15-1752

号)、井藤恵美子(20-2818号)、小川 務(21-3036号)、坂井博一(22-3259号)である。

一般的にこの試験は難しいことで知られ、通例合格までに2～3年はかかる。難しさの原因は専門知識のレベルの高さと、5割を占める記述式の問題を少ない時間内に書き上げるといふ試験形式によるところが大きい。

試験科目は4科目で「森林」「林業」の2科目は試験時間が各々1時間20分、問題数10題で、内5問題は記述式、「森林内の野外活動」と「安全と教育」は試験時間1時間で10問題、短い記述式問題と穴埋め選択式の問題が出る。

気になる合格率であるが、3年間持ち越しのできる科目ごとの合格(部分合格)を含め、全ての科目がパスした時に「本合格」となる。この場合の合格率は15～20%であり、全科目を一度で合格することは「一発合格」と呼び、合格率は5～10%、一度で合格することが難しい試験といえる。

合格は学習のゴールではなくスタートと考えるべきである。今後、東海支部及び猿投の森づくりの会の皆様が資格を取得されることをお勧めする。

「森開きの式」と「国際里山ワーキングホリデー2005」

2004年10月23日、盛大な「森開きの式」を開催してスタートした「猿投の森づくりの会」に猿投山などを会場とする「日本国際ワーキングホリデー2005」の運営依頼が飛び込んできた。このイベントは各国(イギリス、アメリカ、メキシコ、インド)から参加した若者たちとともに、英国最大の自然保全団体であるBTCVのインストラクターの指導を受けて、観察道づくりなどを行い、国民参加の森づくり意識を盛り上げるもので、当会の(故)黒田滋会員が英国ウエールズ大院卒であったため、熱心な議論をすることができ、日英併記の案内板や道標も作成できた。

CBD-COP10(第10回生物多様性条約締約国会議)パートナーシップ事業「6人の生態学者による講演と観察会」を2010年4～10月にかけて開催

講師をお願いした学者は「日本の森林/多様

性の生物学シリーズ」の著者で東北大 中静透氏、森林総研 佐橋憲生氏、森林総研 大井徹氏、名城大学 日野輝明氏、東大秩父演習林 鎌田直人氏の5氏に、森林総研 溝口岳男氏を加えた6名である。

当初、講演テーマのレベルが高く、心配された参加者数も、毎回満席。6回の観察会の場所は、いずれも猿投山でフィールドスタディも毎回晴天に恵まれ、総参加者数は600名を超えた。

猿投の森づくりの会の目指すもの

当会の顧問である只木良也 名古屋大学名誉教授は猿投山県有林の整備作業を開始した森づくり会に対して、ここでは、**照葉樹林へと進む遷移を抑制し、「都市近郊林」として、明るい気持ちの良い落葉樹林を維持することを目的とする管理計画を立てて活動することが肝要**、と指摘。さらに、海外登山で数々の実績のある学術調査の伝統を活かし、単なる管理作業でなく、それに学術調査が伴い、その記録が残され、集積されていくことが重要であると指導された。

都市近郊林(都市林)とは

19世紀以降、欧米の諸都市では住民の心身の休養のために郊外に広大な森林を確保した。ニューヨーク市街地のセントラルパーク(336ha)、スイスのジールブアルト(2350ha)などである。このような都市郊外林の面積は、外界の変動に作用されない内部環境の保持上からも1000ha以上が望ましい。猿投の森(150ha)は、西端を海上の森(530ha)、北端を東大白坂研究林(1292ha)に隣接し、その合計面積は(1972ha)となり森林空間のもつ機能上からも理想的な都市近郊林の面積を満たしていると言える。

猿投の森づくりの施業方針

私ども「森づくりの会」が担当する「猿投の森」150haの構成は、80%(120ha)が落葉と常緑の広葉樹林(雑木林)で、20%(30ha)がスギなどの人工林である。

80%を占める雑木林の施業はこれまで通り、除伐や択伐などを行い、明るい森として維持し、多くの樹種が育つようにする。樹種が増えれば生物も多様化し、災害に強く、水源涵養力のある公益的機能の高い森となる。また、明るく、健全な森は休養林や森林セラピー、

各種レクリエーション活動に向いている。

20%を占める主としてスギの人工林での施業は、これまで通り間伐を進め、残った木を健全に育てる。林床に陽光を入れ落葉広葉樹の天然更新を利用して、異齡、複層、針広混交の森へと誘導し、災害に強い、生物多様性の高い、公益的機能の優れた森に変えていく。**最後に今後への夢をつづろう。**

新しい活動のステージとしての猿投の森について考えてみる

まず重要なことは、猿投山の北面にあたる「猿投の森(県有林・やまじの森)」には以下の夢の実現に不可欠の地形的な条件や動植物の生息状況が整っていることを理解することである。

- ・住民を積極的に受け入れ、住民に開かれた休養の場として活かす。(休養林、森の音楽祭)。北欧、ヨーロッパ諸国では「美しい森の育成は、住民の健康を守るための最も有効な投資」とみなされている。

- ・総合的な自然研究の場(研究林)

猿投の森は上山路川下部の平坦地、美しい滑滝の有る中流域、急傾斜の上流域に広がり、170種を超える樹木「猿投の森の樹木」として刊行、豊かな山野草「猿投の森の山野草・百選」として刊行、赤外線カメラによるカモシカを始め8種類の動物も確認され「猿投の森の動物たち」として刊行。

- ・自然教育の場(自然観察会、森の探検隊)

毎月1回の自然観察会のほか、年1回の幼稚園児等(約100名)による「森の探検隊」を開催している。

- ・森林セラピーの場(森林セラピー基地)

「森林セラピー」とは、「森林等での植物由来の刺激が、生理的リラックス状態をもたらすことにより、免疫能が向上し、病気になりにくい体になるという「非特異的効果」を意味するもので、猿投の森には必要な森林環境が存在していると考えている。

こうした目標を掲げるほか、これまでの雑木林や人工林での作業で養った林業技術を活かして、隣接した里山環境教育の拠点としての「海上の森」にも目を向ける。そして、更に、森林と水の長期観測で実績のある「東大白坂研究林」での森林整備の応援(人工林間伐として実施中)を一層強めたい、と考えている。

支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画

(平成29年2月～平成29年4月分)

2月4日(土)☆

山城：鈴鹿 山名：入道ヶ岳(906m)

リーダー：尾上 昇 締切：1月20日

2月19日(日)☆

山城：布引山地 山名：経ヶ峰(819m)

リーダー：今津英一朗 締切：1月30日

2月22日(水)☆☆

山城：関ヶ原 山名：伊吹山(1,377m)

リーダー：伊藤康信 締切：1月26日

3月8日(水)☆☆

山城：奥美濃

山名：大日岳(1,709m)・天狗山(1,658m)

リーダー：伊藤康信 締切：2月9日

3月18日(土)☆☆

山城：伊勢中部 山名：錫杖ヶ岳(676m)

リーダー：田中 進 締切：2月26日

3月19日(日)☆☆

山城：鈴鹿

山名：鎌ヶ岳(1,161m)～雲母峰縦走

リーダー：磯部 隆 締切：2月27日

4月2日(日)☆

山城：尾張・東海自然歩道

山名：経鹿尾山(273m)・鳩吹山(314.5m)

リーダー：村瀬恭平 締切：3月13日

4月13日(木)☆

山城：愛岐丘陵 山名：春日井三山

道樹山(429m) 大谷山(425m) 弥勒山(436m)

リーダー：川北一博 締切：3月24日

4月15日(土)☆☆

山城：鈴鹿 山名：御池岳(1,247m)

リーダー：高松信治 締切：3月26日

4月29日(土)☆

山城：鈴鹿 山名：亀山宿から鈴鹿峠越え

リーダー：金谷正起 締切：4月9日

山行対象者 支部友会員及び支部会員

申込み方法 ・支部友会員は申込締切日までに、各山行リーダーが示す方法で申し込む。

・締切日 原則山行日 20 日前まで。(締切日を過ぎての参加空き情報はリーダーに直接問い合わせ下さい)

・支部会員は申し込み締切日の翌日以降に、各

山行のリーダーへ問い合わせる。

・山行の募集人員を超えない範囲で、支部会員の参加申し込みを受け付ける。

次回支部友ミーティング

開催内容のお知らせ

① 第22回「スマホを山で活用しよう」

日時：平成29年2月14日(火)

19：00～21：00 支部ルーム

講師：鈴木 慎吾氏(東海支部山行委員長)

② 第23回「最新の登山グッズ」

日時：平成29年4月11日(火)

19：00～21：00 支部ルーム

講師：千葉 泰丈氏(駅前アルプス社長)

支部友会員数

平成28年〇月現在/〇名

リーダー連絡先

尾上 昇 FAX：052-832-3878

メール：onoe@onoe.co.jp

伊藤康信 携帯：090-2577-8137

メール：kobitokaba@mediacat.ne.jp

榊 将美 携帯：090-7237-4410

メール：m.sakaki@minds-consulting.jp

金谷正起 携帯：090-9931-3600

メール：kanaya.masaki@rouge.plala.or.jp

川北一博 携帯 090-3956-4123

メール：kawakitakazuhiro@outlook.com

村瀬恭平 携帯：090-4186-9876

メール：hoshizakari@ezweb.ne.jp

田中 進 携帯：090-9191-8666

メール：t-susumu@peace.ocn.ne.jp

今津英一朗 携帯 090-2616-7549

メール：imazu.eitirou@maroon.plala.or.jp

磯部 隆 携帯：090-9180-7245

メール：takass@yk.commufa.jp

松本陽子 携帯：090-7859-4031

メール：yo-kom@nifty.com

高松信治 携帯：090-3156-5268

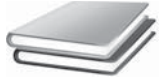
メール：takama2nobu3@yk.commufa.jp

個人山行も J A C 東海登山届けを!



専用携帯電話(担当 山田明美)

080-2632-3776



東海支部の蔵書からの一冊⑩

図書委員会委員長 石田文男

『日本の名山10〈穂高岳〉』

松本市と高山市に跨ぐ標高3,170mの日本第3位の高峰が「穂高岳」である。私はその「穂高岳」に過去、夏や冬に何回か登った。その思い出と魅力を伝えたいことから、このシリーズが良い機会と思い『穂高岳』を取上げた。

この巻は31名の執筆者よりなっている。

- ・ 詩歌の穂高（積 超空、田中清光他）
- ・ 岩と雪の大伽藍（幸田露伴、深田久弥他）
- ・ 穂高連峰登攀史（w・ウェストン、小西政継、石岡繁雄、長谷川恒男他）
- ・ スキー滑降（三浦雄一郎）
- ・ 穂高の地形（五百沢智也）
- ・ 山の人生（上田哲農、小山義治、秋谷豊）
- ・ マチ・エテルナ（今井通子）

この中でも個人的には上田哲農の「穂高生活」に興味・共感もてた。同氏は水彩画家であり有名な登山家(RCCⅡ代表)でもある。

以下は夏の5日間の山行記録である。

「昭和30年7月25日（晴れ）」

松本はうだるような暑さである。・・・山の中の仕事は本当に男らしい仕事だと思う。前から思っていたことだが、絵かきにならないければ、こういう仕事に一生かけたいもんだ。7月26日（晴れ）

昨日、徳沢にテントを張った。・・・

7月28日（晴れ）

疲れているので距離の短いところへと、北尾根へでかける。・・・

7月29日（晴れ）

ともかく天気がいいのが何よりで、毎朝ぬけるような空の青さである。朝早く用意してジャンダルムへ。・・・

7月30日（晴れ）

荷物を担いで、また下りはじめる。」

これは穂高生活の一部を拾ったものだが、淡々たる文章であるも実際は大変だと思うし、魅力を感じさせる。また、各執筆者もそれぞれ独自の文体で大変興味を引く1巻である。

1997年5月15日発行 268頁

図書委員 水野和博



『日本の名山12〈八ヶ岳〉』

私が八ヶ岳を初めて見たのは友人と旅した中学3年の夏休み。深田久弥は「中央線の汽車が甲州の釜無谷を抜け出て、信州の高台に上り着くと、まず私たちの眼を喜ばせるのは広い裾野を広げた八ヶ岳である。全く広い。初めて登った頃は小屋など一つもなく誰にも会わなかった」と言う。

八ヶ岳ほど岳人のみならず文人、画人、音楽家、学者に愛された山は他にないのではいか。様々なジャンルの人がこの本には登場する。東京に近く標高の高さが厳しい冬山となり、岩稜地帯があり高山植物の宝庫であり、広大な裾野は多くの高原を造り旅情をそそると思われる。

長谷川恒男は16歳の時、職場の先輩に初めて冬山に連れて行かれた八ヶ岳を初々しく述べている。「行者小屋までのラッセルを八ヶ岳大冒険」と記す程である。

梅崎春生は遠藤周作夫妻と彼の教え子の女学生達が渋温泉に泊り翌日、嫌がる遠藤周作を連れ出して天狗岳に登る。小雨がふり出すと喜んで一番に引き返す様をユーモア交えて、描いていて可笑しいと。

本多勝一は横岳で起きた初心者の女性死亡事故を現場検証して、非常識な一団のリーダーを糾弾していて考えさせられる。

そして私の最も好きな尾崎喜八の『山の絵本』からは「たてしなの歌」が入っている。詩人でなければ書けない文章は青春の復権と云うべきか胸をしめつけて熱くする。まだ小海線が全通していない昭和8年の作である。八ヶ岳はいい山である（「岳へのいざない」）、で始まる山口耀久の名文『北八ッ彷徨』は多くの若者の心を捉え北八ッの言葉を定着させ

た。文章に引き込まれて思わずザックを担ぎ白樺の落葉を踏みしめながら当ても無く歩きたくなる世界である。私が初めて八ヶ岳に登ったのは、この本が出てほぼ50年経た最近のこと。以来、毎年通うことになった好きな山である。
読図会員 金谷正起

『日本の名山13〈富士山〉part1』

《「名山」中の最「名山」を富士山となす。あに一辞一句だに自美自讃を要せんや、聴けこの山に対する世界の嘆声を。》

「富士」は蝦夷語「火ノ女主」より由来す、もって太古蝦夷人のこの山を崇拜しかつ愛慕せしを知る。》

これは志賀重昂の『日本風景論』の一節で、日本人なら誰もが知っている富士山だが、日本の山「無双の富士山」として世界でも賞賛されていることを述べている。

日本の名山シリーズ全20巻の中で3冊も刊行されているのは富士山だけで、いかにさまざまな人々に興味と影響を与えていることか。

part.1では、「コンハナサクヤ姫」のような神話「あたまを雲の上に出し〜」と誰もが歌える唱歌、短歌、歴史、気象についての論文、富士山が登場するエッセイ、そして漫画まで掲載されておりどれも興味深い。

私が最も好きな文は「富士は私の相棒」（並木宗二郎）である。富士山測候所の職員のために11月から6月まで10日に一度、五合目から約30キロの荷物を運んでいた、平成6年に引退された最後の「強力」の話である。夏の晴れた日の穏やかな日から冬の強風と雪の厳しい日まで経験し富士山を相棒と呼び、どこにどういう風が吹いたらどうなるかなどの富士山のご機嫌もわかり、登れるか登れないか勘でわかるという。その中で「一冬に一度くらい、東京の超高層ビル群がはっきりと見えるときもあります。こういうときは、一服の時間も自然と長くなっています。こんなぜいたくな職場はない。だから、晴れているときはちょっとだけ上に着く時間が遅くなってしまうのです」と述べている。冬の富士山の厳しさがあるからこその言葉だとは思いますが、このような貴重な一服を一度でいいから体験したいと心から思う。縄文時代以前の噴火からの履歴書も掲載され、いろいろな方面から味わえる

一冊である。

1997年1月30日発行 読図会員 遠藤ちさと

『日本の名山6〈白馬岳〉』

「白馬」は中学の頃、スキーで行くようになってから毎年、冬に訪れるなじみある土地です。

昨年の夏、支部友山行で樽池から白馬岳、杓子岳、鍵ヶ岳といわゆる白馬三山を登り、美しい花々と素晴らしい眺望に感動したものである、そんな「白馬岳」の事が知りたくて、この本を手に取りました。

初めに、白馬の山名の由来は「代馬から変化した。代馬と言う名の起りこりは、山の一角に残雪の消えた跡が馬の形になって現れる」

「馬の形が農事しおりとなる」(P16・白馬岳)とある。山は登るだけでなくいつも同じ場所で土地の人々を見守り、季節の移り変わりを伝えてくれる大きな存在だと思いました。

また、「白馬ものがたり」では「ハクサンコザクラの紅紫色は花畑に散った手巻の血が純白の花つぼみを染めた」とあり、姫川は「戦国の昔、武田と上杉の争いで武田勢から逃げる途中に姫が誤って馬から落ちた事で呼ぶようになった」とあります。花にも川にもそれぞれの謂れがある事を知り、あらためて見にいきたくなりました。歴史では「幻の登頂記録発見記」(P30)で明治16年、日本人で初めて知識人として白馬岳に登頂した記録が偶然見つかかり、当時の日本の山岳界となぜ登ることになったのか登山家の人間性について記されています。

総じて、本を読むことで地図を手に登山道を思い描きながら登頂した人たちの思いを得られました。また、実際にそうした同じ道を行くならば、先人達の思いが蘇り違った感動に出会える気がしました。

1997年7月30日 読図会員 村井智恵

第3弾となる『日本の名山』シリーズ(巻20、別巻4)は「穂高岳」「八ヶ岳」「富士山」「白馬岳」の4冊。今回も各原稿筆者の思いがよく伝わっていて、読者に本への興味・自分の山への想いをめぐらせていただけるのでは。

『日本の名山』(20巻+別巻4)

串田孫一、今井通子、今福龍太編

46判変形 発行：博品社

東海岳人列伝(5-1)

～中部山岳界の名伯楽としての跡部昌三～

編集委員会 西山秀夫

名古屋大空襲で焼失した木曾駒の記録

昭和20年3月12日、米軍のB29は紀伊半島から鈴鹿山脈まで北上し、阿下喜上空まで来た。関西へ飛ぶかと見せて名古屋を襲ったのである。空襲警報を解いた名古屋は火の海となり、名古屋城も燃えた。アメリカは非戦闘員まで大量殺戮した。

跡部昌三は登山が大好きで、28歳にして登山用具店を開業していた。転勤族の光岡からの勧めもあり、昭和10年に名古屋山岳会を創立。日本山岳会にも団体加入した。

御在所岳の岩場のルート開拓、その成果を木曾駒の沢に岩に雪の尾根にフィードバック



「山と溪谷」第137号

※この137号は後に日本山岳会東海支部の結成への萌芽がみられる貴重な雑誌である。また当時の岳界の執筆陣のレベルの高さが偲べよう。

「國體鈴鹿山脈」特集

鈴鹿山脈座談会

愛知県側：跡部昌三、熊沢友三郎、新美且博、舟橋幸蔵、上田竹三、木村吉夫、水野カツエ

三重県側：伊達忠雄、杉浦孝男、伊藤洋平、谷口嘉男、倉田正邦、河村俊郎、上田定夫

口絵写真：上田竹三

御在所岳岩場

鈴鹿小景：森本次男

峠・御在所山・湯の山・樹林の山

國體登山競技岩登り部門一石岡繁雄

登山技術第四講 編隊について一伊藤洋平

特別付録：跡部昌三～作図 第五回鈴鹿登山コース略図

伊藤洋平～作表 御在所岳岩場國體コース

して累積した記録集はこの時に灰燼に帰した。まとめて書籍にするつもりで会報とは別に保管していたのが仇になった。

年はすでに39歳になりやり直しは無理だった。心血を注いだ木曾駒

の記録の焼失への無念さは戦後の「岳人」の中央アルプス特集の寄稿にも現れている。焼失した木曾駒の記録の事実に共鳴して山岳会の名称を「中央アルパインクラブ」と命名した愛知県の登山家がいた。跡部昌三の登山への情熱は山岳会の垣根を越えてオマージュの対象となった。「岳人」を創刊した伊藤洋平は登山界の捨て石になるといった。それは跡部昌三へのオマージュだったと今思う。

戦前からメディアを味方にした先見性があった。時代の先を読むリテラシーがあった。商才もなかなかのもので、名古屋初と見られる登山用具店は栄の一等地に開業している。戦後の昭和22年創刊の「岳人」に寄稿と広告を出稿したのも商才の発露である。名古屋新聞、新愛知新聞時代からメディアの重要性を知ったのであろう。

名伯楽とは

中国の格言に「名馬は常にあれど名伯楽は常になし」とある。伯楽は調教師のことで転じてスポーツの世界で選手のコーチに与えられる比喻である。

跡部昌三はまさに不世出の名伯楽といえる。

名古屋山岳会はアルピニストの登竜門であった。会員の加藤幸彦は全日本山岳連盟ジュ



昭和30年代「跡部昌三の店」にて

ガールヒマール遠征隊に参加、1964年には未登峰のギャチュンカン7922m初登頂、ヒマラヤからアルプス、アンデス、アリュージョン列島、チベットまで数々の登頂を果たす。

1965年会員の高田光政は日本人としてアイガー北壁の初登攀を遂げた。1974年会員の中世古直子は日本女性としてヒマラヤのジャイアンツのマナスル8163m峰を初登頂した。その他にも筆者が知らないだけで多くの名登山家を排出している。この業績をして名伯楽と言う言葉が導き出されたのである。

跡部氏の交遊録

名古屋山岳会のみならず、中部山岳連盟を結成して登山界を育成した。

木曾の山村民俗への造詣と関西岳人との交遊も素晴らしい。1924(大正13)年、神戸で日本初の登山用具店「好日山荘」を開業した西岡一男、奥美濃の名著『樹林の山旅』の森本次男らとはともに「木曾会」を結成して歩いた。登山の実践だけでなく、読みかつ書いた。西岡には名著『泉を聴く』があり、森本にも多数あるのに単独の著書が一書もないのが不思議に思う。

筆者は名古屋帝大医学部卒の医師・上田正を知り、会員の大口瑛司氏、東海銀行山岳部の菊田貞明氏らと上田クラブで交わることで跡部昌三を知った。会員であり支部員でもある大口瑛司氏はしばしば「跡部さんは山への情熱がすごかったなあ」と懐旧談を聴いた。

「岳人」へ寄せた木曾の卒塔婆山の話で中世古直子氏は「跡部さんは怖い人だった」とも。

筆者は古書店を回り、「岳人」のバックナンバーの中央アルプスや木曾の特集号を買って集め、跡部昌三の寄稿を読み漁った。天白区の古書店で鍵付ガラスケースに収納された山岳雑誌があった。薄くて汚くてもそれだけ丁寧な扱いをされるのは、と読んだらもう戻せなくなった。昭和24年発行の雑誌「山」の“岩登りの目的”を全文転載。ここに名古屋山岳会の目的と山岳会の有り様も語られて参考になる。以下に引用する。

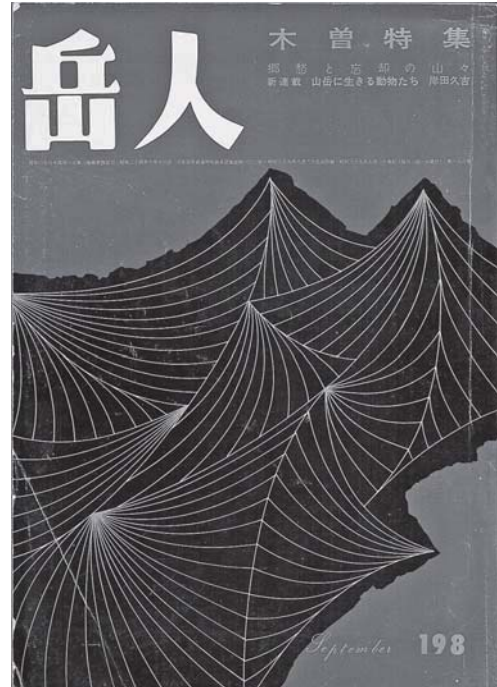
登山指導者の人間学として

○朋文堂昭和24年10月号「山」P77跡部昌三執筆 “岩登りの目的”の全文

いまごろ、岩登りの目的などと持ち出すととんだ物笑いを招くかもしれない。

しかし、岩登りの目的は、といわれてすぐに答えられる人はあまりなさそうである。岩登りの技術書をひっきり繰り返してみても、そんな項目は見当たらない。だが、その答えができない人はおそらくない筈だ。こんな問題はその人その人によって、適当に考え処置されて、いまさら持ち出すことまでもないことのようなのである。

現在、岩登りの目的を定義づけることはさして難事なことではないが、今の私が問題と



「岳人」N0198

木曾特集

郷愁と忘却の山

※木曾会のメンバーが執筆する貴重な雑誌である。

森本次男 木曾の山と谷＝忘れられた山の魅力

新井 清 木曾古道＝故西岡一男翁に捧ぐ

跡部昌三 郷愁の山・谷・峠

東海銀行山岳部 裏木曾の山と谷

※杉田博さん、矢野三七五さん(後に名古屋山岳会)、布目治二さん、村中征也さんが所属していた職域山岳会です。

朝 史門(森本次男のペンネーム) 木曾に入る峠＝

野麦峠・権兵衛峠・木曾峠

矢野三七五(名古屋山岳会) 鉢盛山

木村 博(名古屋山岳会) 大笹沢山

中世古直子(名古屋山岳会) 卒塔婆山＝木曾富士として親しまれる

(※中世古さんが30歳当時の紀行です)

したいのはこのことではない。

岩登りの技術と経験とをもってまだ人の息のかからぬ壁に挑み、未知の岩峯に若さをかけてみようとする人もあろう。このような人は、いわば天才型であって、まったく恵まれた人といえる。しかし、このようなタイプを、一般に求めることは無理であるし、まず 通用しないことである。また、岩登りの天才を養成することも、至難に近いと思う。

職業も、年齢も、環境も、気質も違う人達のあつまりである山岳会などで、天才型を育成しようなどと考えることは、とんでもないことである。かりにこのような天才が輩出されたとしても、それはなんだか宙に浮いた存在のように考えられ、時には単なる看板に過ぎないように思われる。天才型は、むしろ会から離れて、信頼できる仲間とともに、みっちり磨きをかけて、ぐんぐん伸びてゆくことを考えるべきで、新人の養成とか、会の存在意義 など云々していることは邪魔こそなれ、なんのたしにもならぬ。

私のいいたいことは、山が好きというものの、多種多様な人の集まりである山岳会として どこに岩登りの目的を持ってゆくかである。出来れば精鋭主義もよいが、一般山岳会では 谷歩きの好きな会員もあれば、藪山で充分だと思っているものもあって、会としては一部の特定のものだけにかかわってられるものでもなく、つねに全体のことを考えていなければならぬ。これがわずらわしいようならば、あっさり会なんか解消した方がさっぱりしていい。

会としてなりたっている以上、その行くべき道がある。その一つとしてまったき(注1) 登山者への育成の問題がある。岩登りは、その技術は、登山の、技術のエッセンスのように考えられるし、そこに登山の真髄といったものをみだすのである。したがって、好むと好まざるとにかかわらず、ある一定のところまでは、必ずやってもらわなくてはならぬ。でないことには、会として心細くて一人歩きしてもらえないことになる。岩登りと、その技術は登山する上において、基礎技術として修得することが登山者の先決条件としての必須科目であり、捷路(注2)であることをはっきり認識して欲しいのである。

(注1)まったき：古語の全し=またしの形クを促音化して”まったし”となり、その連体形と思われる。完全な、欠けたところがない、の意味。(注2)しょうろ=近道

○岳人N o 126 (昭和33年10月)の「山岳会」特集「入会ということ」抄録

「入会したい人に、どうして入りたいか聞いてみると山登りを教えてもらいたいから、というのが多い。中略。しかし果たして山岳会はこういう人たちの希望を満たすことが出来るであろうか。はっきりいって山岳会はそういう体制をもってはいない。現在の山岳会は教える機関ではなく、山へ登ることの好きな連中の集まりで、より効果的に山を楽しむために会を持っているのであって、教える義務も無ければ、会員とても教えるを受ける権利をもっていない。会費を集めたりするがそれは会の運営のためであって、月謝の意味が含まれてはいない。会長や幹部にしても、一人分の会費を払わされているいようし、役付手当てをもらうどころか、逆にせびられるのがおちである。中略。もう一つはできるだけ先輩と接して見、聞き、そして学ぶことになる。結局は会を仲介として、個人的関係に依存することになるから、教えるを受けようとするものの積極的な意欲が無ければ成績を勝ち取るわけにはいかぬ。」

とまあこんな調子である。現在はアルピニズムの殿堂のように見える名古屋山岳会であるが、実に多種多様な登山者が集まってくるのだった。藪山が良い、沢登りがいい、山スキーが良い、いや、登山は冬山に限るなどと自己主張する彼らを足切りするためではなく、岩登り技術の習得を会員必須の義務と課して山岳会の運営の基本としたのである。筆者はこの文を掘り出して以来、山岳会運営のお手本にしてきた。バイブルだった。岩登りとは壁を攀じることのみならず、登山者の必須の作法のようなものだったのだ。

この文は彼流の人間学と理解できる。価値観の違い、違って当然の趣味の会では跡部さんと言えども権威をかざして威張ってもおれず、統率者として人間支配の何と難しいことよ、と考え抜いた末のことである。

つづく

視覚障がいを持つ支部員・支部友とともに活動を行っているボランティア委員会ならびに亀の会から、「本誌を音声による情報として提供してほしい」との提案が、今年の夏ごろに出された。支部報編集委員会としては、支部の公益活動の一環として、前号の第147号支部報から試行的に始めたので報告する。

パソコン等の情報機器の進化に伴い、音声合成読み上げ機能がソフト化され、普及している。それに伴い、読書のバリアフリー化ともいえるニーズが今回の提案の発端である。提供方法としては、ワード形式による音声化、テキスト形式による音声化等があるが、受益者側の負担として、パソコンソフトに前述の音声合成読み上げ機能が必要となる。

今回の提案者である山田 弘会員は、ワード形式による音声化ソフト付きのパソコンを所有され、ソフトの扱いにも問題がなかったため、支部報編集者側としては、印刷用のワード形式データをテスト的に提示した。結果は、ワード形式の部分は、問題なく音声化できたようだ。

一部、音声化が出来なかった部分もあり、今後の提供方法に課題はあるが、「最初の一步」は、無事踏み出せたと思う。

支部報の公益活動として、ボランティア委員会、亀の会と共通認識を取りながら、息の長い支援活動を考えていきたい。

また、今後は本部の機関紙「山」についても、同様に配信を本部「山」編集者と計画しているところである。

東海支部俳壇

山蕩児心酔

鈴鹿路の黎明に踏む霜柱

秋空に崩れつんざくスバリ沢

冬山のルート偵察に大スバリ沢に入る。下降途中でとんでもない大岩なだれに私を含め仲間四人が遭遇。偶然岩をへずっていて奇跡的に助かる。ダンブ何百杯もあるうか、あれの直撃を受けていたら永久に岩の下。今でも思い出すと冷や汗どころか、身の毛がよだつ。

南無三とノマへの恐怖谷渡る

ノマ…雪崩のこと。越中・飛騨地方の方言。

落石や尿ちびりて岩を攀づ

雷神の横走りたり奥穂高

ハング攀づ放心の空罌雲

岩登りのルート上にはだかる庇状の岩。

身も鯉へし夏の剣は雨四日

月光下真昼のごとし弥陀ヶ原

山蕩児酔い潰れたる炉端かな

その色や胸まで焦す七変化

七変化…紫陽花の別称。花言葉は、「あなたは美しいが冷淡だ」。

西山秀夫

能登半島の一等三角点(高坂山)

さわやかや独り占めせる三角点

奥美濃・日永岳

霧深し曾遊の山みな見へず

たはずめば頂上に霧が降る

シロモジの初黄葉見し日永岳

紅くれないの一と塊のマルバノキ

山里を去りつつ鹿に見送られ

台高・迷岳

去りがたき山路を飾る照り紅葉

な迷ひそと赤布付けし秋の山

(初句のなくそは迷わないでの意味)

君ヶ畑の太皇器地祖神社

木地師なる祖神の宮の冬支度

鈴鹿・天狗堂

薄幸の佳人か色葉散りにけり

山時雨皆合羽着よ急ぐべし

忘年山行

一つ鍋つつけば親し山仲間

委員会への入会のお誘い

東海支部に所属している方は支部山行や新年懇親会・支部総会などに参加して支部員との交流を図る機会があります。ただ、これだけではクラブライフを楽しむと云う本来の支部活動の目的達成には不十分です。支部の組織である委員会・同好会が30近くありそのいずれかに所属していただくとさらに支部ライフを楽しむことが出来ます。支部報で各委員会紹介を逐次していただきますのでいずれかの委員会への所属をご検討ください。

写真展実行委員会のご案内

1. 本委員会の目的

- ①2年に1回「東海岳人写真展」を開催する。
 - ・平成28年3月には市民ギャラリー栄で支部員、支部友会員の作品100点近くを展示し、期間中に一般市民2000人以上の来場があった。
- ②写真撮影山行を企画、実施
 - ・美しい景色や綺麗な高山植物などの見られる山や高原への山行を企画・実施する。
 - ・最近では、馬場島、美ヶ原、冬の上高地、西穂高、雪の北八ヶ岳などへ山行。
- ③山や自然の写真を中心とした文化普及活動
 - ・今後は、山岳や自然を対象とした写真教室や撮影会、交流会なども計画してゆきたい。

2. 会合の頻度

打ち合わせは写真展開催前年には毎月第1木曜日、その他の年は偶数月第1木曜日
写真撮影山行はほぼ毎月1回程度企画、参加は自由です。写真展開催前半年くらいは募集や開催準備のための活動が増えます。

3. 委員会に参加による楽しみなど

実行委員会は、アットホームな雰囲気です、いつも写真や山行の話で盛り上がります。

写真に関する高い技術を持った人もいるので、写真に興味のある方には勉強になります。他の組織団体の写真展などにも、みんなで出かけたりして実行委員間の交流に努めています。

4. 委員会への入会の方法

下記へご連絡下さい

実行委員長 井上寛之 携帯 090-6590-6669
Email:shasinn@jactokai.net

または、写真展実行委員までご連絡下さい。

ボランティア委員会のご案内

1. 本委員会の目的

山に登るという楽しさを、素晴らしさを、少しでも多くの人に知ってもらうため、登山弱者である、障がいのある人、子供たちとともに、一緒に登って支援します。

同時に、この活動は、私たちにとっても多くの気づきがあり、登山に対する考え方のみならず、人の無限の可能性までを考える良い機会となっています。

2. 会合の頻度

打ち合わせは月に一回、第三火曜日に、ルームで行います。

フィールドでの行事は年に、大きなのが4回。春に視覚障がい者支援登山と、知的障がい者支援登山。秋に視覚障がい者支援登山と、幼稚園児支援登山を行っています。さらに、月一で、視覚障がい者支援登山を行っています。その他に、他の障がい者支援団体の行事に参加しています。

また、委員会メンバーと4項記載の支援者メンバーとの親睦を兼ねた山行を年に3回くらい行っています。いずれも、自由参加です。

3. 委員会に参加による楽しみなど

目的にも書きましたが、登山を通して多くの事に気付かされます。多くの笑顔に出会えます。支援登山の基本は、支援する側、される側、お互いの「ありがとう」の気持ちです。それが、ボランティア登山の楽しみであり、張り合いです。また、支部以外の外部団体を含め、たくさんの人と出会えます。

4. 委員会への入会の方法

下記へご連絡下さい

委員長 前田隆久 携帯 090-7303-9076
Email:maedaiq@gmail.com

また、支援登山は委員会メンバーだけではできないので、委員会以外の支部員、学生連盟のみなさんの力を借りて行っています。そのための組織として支援者グループを組織しており、70名近い方が登録されています。登録いただくと、行事のご案内をメールで差し上げています。支援者登録だけでも結構ですので、興味のある方はご連絡ください。

総務担当 副支部長 佐野忠則

委員会報告

【写真展実行委員会】

～東海岳人写真展実行委員会主催の
紅葉の馬場島と「劔の大王杉」・中山からの
「深秋の劔岳西面」撮影山行～

去る10月30日、31日に、今年5月中旬に
実施した初夏の馬場島撮影山行が大好評だっ
たので秋の馬場島撮影山行を開催した。参加者
はSさんの高校時代の先輩を入れて総勢9名
(女性6名、男性3名)と賑やかな撮影山行とな
った。前回同様に名鉄バスセンターに集合し、
名鉄バスで東海北陸自動車道経由富山駅前へ、
富山駅(富山地鉄)から上市駅へ、上市からは9
人乗りジャンボタクシーで馬場島荘へ、途中県
道333号線劔岳公園線の早月川に架かる「伊折
橋」にジャンボタクシーを止めて、まずは早月
川と劔岳をカメラに納めた。



劔の大王杉

初日の30日は馬場島荘到着後すぐに昼食、名物の地元の大きななめこが入った蕎麦やうどんを舌鼓を打ってから、深秋の馬場島から地元の方々もあまりご存知の無い「劔の大王杉」の撮影に向かった。途中の林道にも何本もの立山杉を見る事が出来るが、約1時間程登った処にある「大王杉」の巨木には皆さん感嘆の声を上げ撮影開始、また巨木の空洞部分に入りポーズを決めて撮影。約40分後「大王杉」に別れを告げて宿泊先の馬場島荘に向けて下った。夕食までの間にお風呂に浸かり汗を流してからの夕食は、これまた山中とは思えないほどの豪華な手料理で富山の名品カジキの昆布じめ等々を始め美味しい心のこもったおもてなし料理に感激。また従業員の皆さ



中山山頂にて

んの対応や室内外の清潔さは一流ホテル並みである。食後は大部屋に全員集合して、各自持参の酒肴で懇親会、自己紹介や近況報告で消灯時間の21時迄盛り上がった。

翌31日は二番目の撮影目的地の中山山頂からの劔岳西面へ向けて登山開始。途中、樹間から見え隠れする劔岳を始め赤谷山や大窓、小窓、マッチ箱、三ノ窓を撮影しながら山頂を目指す。ここでも幹周りの大きい見事な巨大杉がみられ、圧巻は綺麗に並んだ五本杉、更に歩を進めて振り返ると、氷見から延びる能登半島が見え噴き出した汗も心地良く、約2時間程で中山山頂(1255m)へ到着。今回はお天気に恵まれてヨカッター！の声が上がる。喉を潤し劔岳西面や早月尾根の撮影を堪能し約1時間後山頂を後にして、馬場島に向けて深秋の東小糸谷を下る。途中数回丸太の掛かった沢を渡り、全員無事に馬場島荘に帰着。復路は往路と同様の交通機関で名古屋に向い名駅前に20時着解散となった。

参加されたTさんからは、「今回も☆美味しい☆爽やか☆楽しい☆貴重なお話そして今なら触れられる☆大王杉5つ星揃いの馬場島でした」とメールを頂き感激する。また急遽所用で参加出来なくなったMさんは、新潟からの帰途自家用車で31日朝、馬場島荘前にお顔をみせて頂いた。

今回は珍しく天気予報が大きく外れて好天に恵まれ、これは参加の皆さんの普段の行いに味方してくれたのでしょう。我々が馬場島を離れる頃になってようやく雲が出て来て、雲に見送られた形になった。心に残る馬場島またいつの日か訪れてみたいと思う。

坂本 孝

会 務 報 告

【2016年9月常務委員会】

日時：9月28日（水）19時00分～20時45分

1. 支部長挨拶（高橋）

全国支部長会議が9月24～25日に開催され、「ゴザフェス」「夏山フェスタ」について報告した。出席者が100人以上である為、初めて関東と関西に分かれて行われた。

後日要約整理し配布する予定とのこと。

2. 委員会報告

①会計（市川）：現在、会費未納者：支部員は50名、支部友は3名。請求を次の支部報送付に同封する。

②岳連（市川）：日山協の名称が日本山岳スポーツライミング協会と変更される方向である。日山協の講座の案内などはボードに掲示する。

③支部友委員会（金谷）：8月、9月の山行並びに予定の報告。朝明茶屋における支部友ミーティングを10/1～2に行う。夏山フェスタで登山に興味があるとアンケートに記載した人を対象とした体験登山が天候不順のため中止となり再度企画実行したいとのこと。現在51名。

④山行委員会（鈴木委員長欠席の為、石井副委員長）：配布された資料に基づき報告。山行計画、実施状況などの報告があった。明確な山行計画作りをし、必ず下山連絡をする。委員会全員で山行企画に携わって行きたい等の話があった。

⑤亀の会委員会（加藤）：9月29日月例登山「五井山・宮地山」公共交通機関利用で20名の参加。11月11～13日企画山行「妙義山・浅間山」予定、雨の場合は離山へ行くとのこと。

⑥猿投の森づくりの会（小川）：配布された資料に基づき、9月の活動報告並びに今後の予定の報告。10月11日の音楽祭事前準備に参加してほしい旨の話があった。

⑦東海ユース（山田）：会員30名を超えるとスタッフの増員が必要となるので協力を依頼する予定。ユース入会3年生に今後の運営委員会を任せていきたい。10/29～30日に本部ユースとの交流登山を御池岳で行う予定とのこと。

⑧支部報編纂委員会（星）：支部報 No. 147 を9月30日午後発送、10月上旬着予定。視覚障害の会員へ No. 147 からメールで支部報（Wordにて音声聴取可能）を送ることを試行した。

⑨青年部（藤寄）：10月15～16日に技術講習会並びにワディントン報告会をOMCビル4Fで行

う予定との事。

⑩登山教室委員会：委員長欠席の為、報告なし。

⑪自然保護委員会（南川）：配布された資料に基づき第6回自然観察山行、第8回猿投山自然観察調査山行等の報告。

⑫ボランティア委員会（前田）：月例ブラインド山行は10月23日、親と子のふれあい登山10月15日と29日。秋のブラインド山行は11月13日予定。

本部会報「山」も視覚障害者会員向けに音声化を願いたい⇒実施の方向（星）とのこと。

⑬遭難対策委員会（山田）：提出された計画書の中には不完全なものもある。山行に参加するメンバーが主体的に関わるとミスも防げるのではないかとのこと。計画書提出数は～8/20は54件、～9/20は34件との報告。

⑭写真展実行委員会（井上）：次回の写真展は2018年、現在パネル高騰化対策を検討中。撮影山行の実施と企画の報告があった。

⑮森の音楽祭実行委員会（箕浦）：音楽祭のための整備作業を10月11日に行う、是非皆さんの協力をお願いしたい。

⑯デジタルメディア委員会（井上）：10月から動きだす。定期として月1回、急ぎの再には随時配信。対象者は希望者。資料を参考に運用イメージの説明があった。

⑰技術向上委員会（片岡）：11月29日の冬山雪山の講演会の案内を支部報 No. 147 に同封した。9月23日～25日の「中高年安全登山指導者講習会」に鈴木氏が出席。後日伝達講習会をもつ予定。

⑱その他：*新年会（1月21日）はウィル愛知でおこなう。*山の日報告：8月11日に御在所で啓発活動を行なった。2000人位の登山者があり、かなりの人にPRできた。

出席：高橋、山田、佐野、片岡、和田、加藤、石井、小川、星、南川、前田、箕浦、金谷、石田、井上、藤寄、市川

【2016年10月常務委員会】

日時：10月26日（水）19時00分～20時45分

1. 支部長挨拶（高橋） 下記報告あり

①帰国した山田利行がワディントン山群の報告会を10月16日行った旨報告、青年部主体に盛況であった。今度の活躍に期待したい。

②森の音楽祭－22日盛況のうちに終わった。

皆様のご協力に感謝します旨挨拶。

2. 審議事項

①常務委員会の懇親会・懇親登山を、12月10日(懇親会)～11日(登山)朝明茶屋にて行うこととなった。出欠を総務委員長まで連絡のこと。

3. 委員会報告

①支部友委員会(金谷):山行結果と予定につき報告、並びに「朝明ミーティング」結果報告。過去2回雨天のため中止になっていた体験山行を12月4日「入道ヶ岳」で行うこととした旨報告。

②山行委員会(鈴木):HP掲載月例山行、H28年度方針と具体化など報告。視覚障がい者の支部山行についての対応についてボランティア委員会の協力を得られた。テントなどの備品管理が杜撰となっている為検討が必要であるとの指摘。一関係委員会(山行委員会、登山教室、青年部、学連など)で対応を検討することとなった。

③会計(市川):支部会費未納者には10月の支部報送付時に請求している。

本部会費未納者については、1月末の会報発送時に会費未納者への請求する予定である旨報告。

④猿投の森づくり委員会(小川):配布された資料に基づき作業の実施状況、今後の予定につき報告。猿投の森づくりの活動が「広報せと」で紹介された旨報告。

⑤東海ユース(山田):配布された資料に基づき活動報告。会員は現在30名、2名が支部員に転籍した旨報告。10月からテーマを設けて(読図、机上登山、ツェルト張等)実技を伴う定例山行を行う予定との事。

⑥支部報編纂委員会(星):No.148の原稿締切は11月15日。視覚障がいの会員へワードで支部報の配信を行った。「山」も同様の配信に出来ないか本部へ打診しているとのこと。

各委員会への加入のお誘い—佐野副支部長が委員会加入促進のための文案(フォーマット)を作成し、それに沿って各委員会が紹介記事を用意し、支部報に順次掲載していくこととなった。支部報148号から2委員会づつ紹介記事掲載することとなった。

⑦青年部(藤寄欠席の為、高橋支部長):学生連盟(高橋)11月25日総会がある。

⑧遭難対策委員会(山田):9/21～10/20までの届出状況:Gメール43件。必ず計画書は出してほしい。

⑨登山教室委員会(天野):森の音楽祭「猿投山を目指すハイキング」では、当日欠席が多かった、マナーが悪い人もいた。今年は時間にゆとりを持ってのハイキングが出来たとの事。

⑩自然保護委員会(南川):猿投山自然観察調査山行の纏めは増田理子大阪産業大教授の意見を受け「巨木」とする。

⑪図書委員会(石田):特になし

⑫ボランティア委員会(前田):今後の行事を報告。視覚障がい者全国交流登山大会(2年に一度開催)が2018年10月6日～8日、高尾山で行われる。参加の方向で検討との事。

⑬技術向上委員会(片岡):特になし

⑭海外登山(片岡):特になし

⑮写真展実行委員会(井上):撮影山行の企画、OBの櫻井さんからの支援を受けパネル作成体験を予定、などの話があった。

⑯デジタルメディア委員会(井上):メール配信システムをスタートした。集約したアドレスへは98%届いた。いろいろな機会を利用してメール配信サービスのPRをしていく。

⑰森の音楽祭実行委員会(毛利):一般申込数は325名だったが当日は242名、ドタキャンなどもあり参加数が減少。原因分析が必要。総参加人数は楽団員、スタッフを合わせると500名以上となった。

⑱亀の会(加藤):10/11～13 妙義山、翌日は黒斑山へ。10月27日は比叡山へいく。現在61名の会員。

⑲総務委員会(毛利):コピー機について ①各委員会が使用したコピー数を毎月カウントするようにした。②10枚以上の場合、A4×2枚→A3×1枚でコピーし、経費節約(4円/枚)を心がけてほしい。③IDパスワード一覧表は各委員長が管理し掲示はやめる。④カラー(20円/枚)の場合は前もって総務に連絡してほしい。新年懇親会の案内は11月後半に送付予定。11月の常務委員会は24日(木曜日)。

出席者:高橋、山田、佐野、片岡、尾上、加藤、鈴木、小川、星、天野、南川、前田、箕浦、金谷、毛利、井上、市川、石田

【2016年11月常務委員会】

日時:11月24日(木)19時00分～21時00分
1. マカルー60周年記念報告(尾上):11月18日から24日までで式典参加(於カンドベリ)ため、田中、尾崎氏と共に出席し歓待を受けた。両氏に報告を兼ねた原稿を依頼、支部報に掲載の予定。

2. 支部長挨拶(高橋):他の支部が富士山滑落事故を起こし2名が亡くなり痛ましい思いである。「安全第一」を心がけてほしい。

3. 委員会報告

①支部友委員会(金谷):配布された資料に基づき10月山行報告と11月の予定を報告。2月14日の支部友ミーティング「スマホを山で活用しよう」は支部友、支部員対象の公開講座である。体験山行は7名の参加で実施予定とのこと。現在55名。

②山行委員会(鈴木):配布された資料に基づき実施状況、今後の予定など報告。3月24日にリーダー会議を開催予定、育成確保に努める。テントなど会の備品の管理ルールを関係部会で今後検討の必要がある。新年の支部報に「備品の取扱い」の記事を掲載する旨の報告があった。

③亀の会(加藤):配布された資料に基づき実施山行と今後の予定を報告。キャンセルについて、ルール通りの運用を求める声が強かった。現在61名。

④東海ユース(山田):配布された資料に基づき活動報告。会員は現在30名、11月から実技を伴う山行を実施中。H29年4月にユース4年目に入る、会員による山行運営への移行を検討。他支部ユースとの合同登山を検討中とのこと。悪天候による山行中止の際にはルームで講習を行う予定とのこと。

⑤自然保護委員会(南川氏欠席の為、山田氏):第20回森の勉強会が11月5日~6日に実施、森の勉強会は今回をもって終了となった。猿投山自然観察調査山行について増田理子氏から鹿の害が判別できるような植生調査の継続をとの助言があった旨報告。

⑥登山教室委員会(天野氏欠席の為、山田氏):朝日教室は受講生の減少により閉講となる可能性がある。10月28日、11月5日に指導員研修を実施。11月26日~27日は17名で長時間歩行テント泊を予定。東海支部主催の登山教室について:登山教室委員会では現段階では難しくまず骨子を常務委員会で検討してほしい旨報告。

⑦猿投の森づくり委員会(小川):今後の予定につき報告。12月17日は作業納め、1月14日新年会、JACの皆さんの参加を歓迎。

*審議事項:先月提案があった「ハイキングコースの枯死木の整備」について:和田氏を中心に、東海自然歩道管理担当者にも協力を得、各

委員会、学生等の参加も得て実施予定である。常務委員会で了解された。

⑧技術向上委員会(片岡):外部講師による講演会の実施と予定。中高年安全登山研修(支部内展開講習)を1月26日に実施予定(支部報No.148で案内)である。

⑨写真展実行委員会(井上):写真山行の報告と実施予定を報告。12月1日に委員会と忘年会の予定。

⑩デジタルメディア委員会(井上):メールによる発信後の実施状況、新加入者への呼びかけとして支部報に掲載・新年会の案内ハガキなどで呼び掛けていく。メールでの発信依頼は総務へ申し出。

⑪ボランティア委員会(前田氏欠席で毛利氏):配布された資料に基づき報告。

⑫支部報編集委員会(星):No.148の原稿未提出の方は提出をお願いします。

4. 審議

①準会員制度について(毛利):配布された案をもとに説明。本部における準会員制度が開始されたのに伴い支部においても「準会員」の規程を加える必要がある。常務委員会で了承された。

②JACからのグッズ販売について(毛利):配布された資料を基に説明。JAC会員向け、販売窓口は駅前アルプス。常務委員会で了承された。

出席:高橋、山田、片岡、尾上、加藤、鈴木、小川、星、箕浦、金谷、毛利、和田、井上、市川、石田

総務委員会 毛利邦男 記

ル ー ム 日 誌

—・—	9月	—・—・—・—・—・—
	2日(金)	古道塩の道
	3日(土)	東海 YOUTH
	5日(月)	支部友委員会
	6日(火)	県岳連
	7日(水)	青年部/TNCC(同好会)
	8日(木)	自然保護委員会
	12日(月)	登山教室委員会
	15日(木)	東海学生山岳連盟
	16日(金)	森の音楽祭実行委員会/ 東海ユース
	19日(月)	読図会・図書委員会
	20日(火)	ボランティア委員会
	21日(水)	山行委員会/総務委員会/ 正副支部長会議
	23日(金)	技術向上委員会

- 27日(火) 猿投の森運営委員会
 28日(水) 常務委員会
 29日(木) 山行委員会(支部山行打合せ)
 30日(金) 支部報発送
- ・— 10月 —・—・—・—・—・—
- 3日(月) 支部友委員会
 4日(火) 県岳連
 5日(水) 青年部/TNCC(同好会)
 6日(木) 写真展委員会
 7日(金) 森の音楽祭実行委員会/
 古道塩の道
- 11日(火) 登山教室委員会
 12日(水) 支部友ミーティング
 13日(木) 自然保護委員会
 17日(月) 読図会・図書委員会
 18日(火) ボランティア委員会
 19日(水) 山行委員会/総務委員会/
 正副支部長会議
 20日(木) 東海学生山岳連盟
 21日(金) 東海ユース/指導員講習
 研修
- 25日(火) 猿投の森運営委員会
 26日(水) 常務委員会
 27日(木) 技術向上委員会
 28日(金) 亀の会/登山教室委員会

- ・— 11月 —・—・—・—・—・—
- 1日(火) 県岳連
 2日(水) 青年部/TNCC(同好会)
 4日(金) 古道塩の道
 7日(月) 支部友委員会
 10日(木) 自然保護委員会
 14日(月) 登山教室委員会
 15日(火) ボランティア委員会
 16日(水) 山行委員会/総務委員会/
 正副支部長会議
 17日(木) 東海学生山岳連盟
 19日(土) 講演会(講師 和田誠志氏)
 21日(月) 読図会・図書委員会
 22日(火) 猿投の森運営委員会
 24日(木) 常務委員会
 25日(金) 東海学生連盟総会
 28日(月) 森の音楽祭

会員異動

- 入会:** 中山春香(16057) 国枝恵理子(16072)
 青木小百合(16065) 市原明子(16066)
 杉本 晴(16096) 林久美子(16098)
 長谷奈緒(16100)
- 退会:** 松沢秀俊(14623) 田中國興(14624)
 土井竹美(15541) 渡邊英紀(13963)

I N F O R M A T I O N

【総務委員会からのお知らせ】

◆東海支部新年懇親会のご案内◆
 日 時;平成29年1月21日(土) 受付16時~
 講演及び新年懇親会17時00分~20時30分(予定)
 場 所;ウイルあいち
 (愛知県女性総合センター)

名古屋市東区上堅杉町1番地

TEL: 052-962-2511

内 容;

第1部 挨拶と講演 (17時~16時)

- ・支部長挨拶
- ・講演 明治大学山岳部出身でNHKの山岳カメラマンとして活躍されている関祐一氏をお招きし『山岳番組の舞台裏』と題し山番組の変遷、最近取り組んだ番組(さわやか自然百景、にっぽん百名山、夫婦で挑んだ大岩壁、グレートトラバース、パタゴニアレースなど)について、また番組のねらいなどにつき映像を交えながら講演をして頂く予定です。是非ご参加くだ

さい。

第2部 懇親会 (18時30分~20時30分)

・懇親会費 5000円(予定)

出欠の返事が未だの方は、至急ご連絡下さい。
 総務委員長 毛利 邦男

◆準会員制度について◆

本部における準会員制度が開始されたのに伴い、東海支部においても支部規約に「準会員」の規程を加える必要がある。しかし、支部規程改訂には総会での承認が必要であることから次期総会までの暫定措置として「準会員暫定規程」を下記の通り定めるものとする: -

◆準会員暫定規程◆

日本山岳会定款施行細則に定める準会員の東海支部における取り扱いについては平成29年度の支部総会で定めるまでの間、次の通りとする。『公益社団法人日本山岳会東海支部規約第5条の通常会員と同じ扱いとする。但し、

支部総会における議決権を持たないものとする。
総務委員長 毛利 邦男

【山行委員会からのお知らせ】

◆支部山行への参加について

- ①計画が出来次第順次登録されますので、ホームページやメール配信による「東海支部だより」を注意して見てください。
- ②支部山行ホームページから申し込んでください。(申込期限・定員があります)
- ③月に4~5座の山行を計画していきます。
- ④出来るだけ多くの方のご参加を期待しています。
- ⑤自分の実力にあった山に参加しましょう。
- ⑥パスワードの問合せなどは、ホームページの「よくある質問」欄を見てください。
- ⑦「問い合わせ・連絡」欄でやってほしい山名等をお教えてください。

山行委員長 鈴木慎吾

【技術向上委員会からのお知らせ】

◆「中高年安全登山指導者講習会」報告会

委員会では技術向上の一環として、日本山岳協会等の主催で9月に開催された「中高年安全登山指導者講習会」に鈴木慎吾委員を派遣しました。その講習会で学んだ内容についての報告会を下記要領で開催いたします。中高年安全登山に関心のある方は、ぜひご参加ください。

1. 日時：平成29年1月26日(木)
午後7時~9時
2. 場所：支部ルーム
3. 内容：①道迷い防止のための
読図ナビゲーション
②中高年登山の課題
技術向上委員長 片岡泰彦

★支部備品の使用について(お願い)

最近支部ルームに置いてある山岳会の備品(登山教室、山行委員会等管理)を無断借用するケースが時々見うけられます。借用する場合は、「備品貸出予約表」が置いてありますので、必ずそれに記帳し、レンタル代金を支払って借りてください。また、テント、ロープ、アイゼン等使用した後はきれいに清掃をして返してください。

【写真展実行委員会からのお知らせ】

下記のような写真撮影山行を企画しています。是非、参加をご検討ください。

写真撮影山行では、登攀・歩行を少なくし、写真を撮影できる自由時間を多くした、山の景色や花などの撮影対象が多い場所への山行を計画しています。カメラはコンパクトデジカメ、三脚無しでもOKです。

- ① 美ヶ原
・月日：2月16日~17日 1泊2日
・交通手段：JR松本駅集合後送迎バス
・宿泊：王ヶ頭ホテル
・撮影対象：雪の美ヶ原、北ア、八ヶ岳富士山、南アルプスなどの展望
・申込締切：1月15日
- ② 白馬八方尾根
・月日：3月24日~25日 1泊2日
・交通手段：自動車
・宿泊：八方池山荘
・撮影対象：雪の白馬連峰
・申込締切：2月末

*東海支部のHPに詳細が掲載してあります。メニューで「写真展実行委員会」をクリックしてください。
*月日や行程などは参加希望者との相談で変更する可能性があります。
*参加希望、問い合わせは、井上 (090-6590-6669、shasin@jactokai.net) または、写真展実行委員までご連絡ください。

写真展実行委員会 井上寛之

【支部友委員会からのお知らせ】

第22回支部友ミーティングのご案内
(オープン講演会)

今回の支部友ミーティングは、他の支部員の皆様からのご要望で、オープン講演会といたしました。多くの支部員の皆様方のご出席をお待ち申し上げます。

期 日：平成29年2月14日(火)
時間・場所：午後7時~9時 於支部ルーム
テーマ：「スマホを山で活用しよう」
講 師：鈴木慎吾氏(東海支部山行委員長)

編集後記

あけましておめでとうございます。新年号は支部の活発な活動を反映し、ページ数も過去最高となりました。今年も皆様の活発な活動を期待しています。
星 一男

